

論文審査の要旨

本稿は、平成7年兵庫県南部地震（M7.3）によって引き起こされた大規模地震災害である「阪神・淡路大震災」において数多く開設された避難所のうち、小・中・高等学校に開設された、いわゆる「学校避難所」の実態を当時の関係者が残した一次史料を分析することで明らかにするとともに、そこで起こった諸問題を教訓として将来の地震災害の軽減（円滑な避難所運営）に活かすことを目的としたものである。

「阪神・淡路大震災」における避難所に関連する先行研究は、直後から多くの研究者が現地入りして状況を調査したり、聞き取り調査したりした結果の報告が数多く残されている。しかし、その多くが震災時の混乱の中での調査であり、調査する方もされる方も落ち着いて対処することが難しい時期であったと考えられる。そのため当時の避難所で起きた事柄の諸相を正確に解明することは困難であったと考えられる。

一方、本稿で筆者が取り上げた「避難所日誌」は、震災当時に避難所運営に携わった学校教職員、自治体派遣職員が避難所運営上で必要であった事務的事項と活動内容を紙媒体に記録したもので、当時の避難所運営の実態を伝える貴重な一次史料である。当時の関係者の多くが存命である現時点でのこの資料の取り扱い、個人情報保護の観点からの注意・配慮が必要ではあるが、次の巨大地震発生が危惧されている今、これを分析することは、地震災害から生活復元にあたる被災者に対する公的支援をより円滑に遂行するために緊急に取り組むべき課題であると言える。さらに、筆者は、避難所日誌から得られる情報を補完する意味で、当時の関係者等への聞き取り調査も実施し、当時の避難所運営の実態をより正確に把握しようと努めている。

本稿において、筆者は、第1章で上記のような避難所日誌のもつ重要性を述べたのち、第2章では、学校避難所の開設から閉鎖までの推移を「学校」という教育の場であることを視野に入れながら、4つの期間に区分して分析している。第3章では、学校避難所における避難所日誌の役割について分析し、教職員が作成する避難所日誌と自治体派遣職員が作成する避難所日誌に記載意図が違う点を指摘している。第4章では、避難所におけるボランティアの支援者の果たした避難所運営上の役割・位置づけについて分析した。第5章では、震災発生当時、避難所に指定されていなかった学校にも多くの被災者が避難し、そのために発生した「指定外大規模避難所」の一つを取り上げて分析している。第6章では、現在においても方針が確立していない避難所におけるペットの取扱いと喫煙問題とを取り上げている。第7章では、阪神・淡路大震災時に作成された避難所運営上創出された「現場のノウハウ」の重要性を将来予測される大規模地震災害時に活用すべき教訓として、現在、国や自治体において作成されつつある「避難所運営マニュアル」の基礎として位置付ける必要性を提起している。

以上のように、本論文は、関係者の多くがまだ存命である現代文書である震災資料を数多く調査し歴史学的手法で分析したもので、「地震災害史」の分野における新しい試みであると同時に、いずれまたやってくる地震災害発生後の自治体支援のあり方に活用できる貴重な「教訓」を提示し「防災学」の側面も併せ持つ論文として評価できる。以上から、審査委員会として博士（人間文化学）の学位を授与するに相応しいものと認める。